



寄稿

3 「コロナ報道」 新聞づくりも右往左往



産経新聞 和歌山支局長

小畑 三秋

昨年5月1日、元号が「平成」から「令和」に変わったその日、大阪から和歌山支局に着任しました。引っ越しで和歌山市内に入った途端、心なしか風がやわらかく感じたのを思い出します。

それから1年あまり。美しく和やかにという「令和」に込められた思いとは裏腹に、新型コロナウイルスが日本のみならず世界中を席卷。緊急事態宣言による外出自粛の際は、人の動きがぴたりと止まりました。経済の落ち込みは1929年に始まった世界恐慌以来ともいわれます。

新聞社も、取材に追われるだけでなく、感染防止の観点から取材方法そのものの見直しも迫られました。「対面取材は控える」「できるだけ在宅で」「メールや電話の活用を」との指示が本社から出されました。「取材は人に会ってなんぼや」と若いころからたたき込まれた現場主義の常識が一変。コロナによって新聞づくりも振り回されています。

一方で、近畿でいち早く感染が拡大し、全国初の「院内感染」が発生した和歌山県は徹底した検査で抑制に努め、「和歌山モデル」として注目されました。まずは、県内で感染が確認された頃から書き起こしたいと思います。

■なぜ湯浅の病院で？

「和歌山でコロナ感染が出たらしい。県が対策会議を開き、知事が会見するようです」。2月13日午後6時ごろ、県政担当記者から和歌山支局に電話が入りました。

このころ、中国・武漢から広がった感染は、日本では東京のタクシー運転手、横浜港のクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」の乗船者に集中。一方の関西では、まだ奈良や大阪などで数人程度でした。

「なぜ和歌山で」。思わずデスクと顔を見合わせました。県内でも、遠くない時期に感染者が

出ることは予想され、和歌山支局でも緊急時に備えた取材について検討をしていたところでした。とはいえ、当時はまだ大半が中国人観光客関連や帰国者らに限られていたため、「まずは中国からのインバウンド（訪日外国人）が多い大阪から広がるのでは」と考えていました。

ところが、「感染者は済生会有田病院（湯浅町）の外科医師」との情報がいったときは、肝を冷やしました。患者に感染が拡大すれば病院封鎖もあるかもしれない。次々と最悪のシナリオが浮かびました。

この医師に、直近2週間の渡航歴はありませんでした。「なぜ湯浅町？」「なぜ医師が…」。

疑問が幾つも浮かびました。しかし、朝刊の締め切り時間に原稿を間に合わせないといけない。午後8時を過ぎても知事会見は続いていましたが、現場の記者は会見を聞きながらパソコンのキーボードをたたいて原稿を執筆。何とか間に合わせ、朝刊1面に「和歌山で外科医感染」と大きな見出しで報じられました。

病院にも記者が走りましたが、当直の警備員は「こちらでは何も分かりません」との返答に終始。病棟では複数の部屋の明かりがともされていましたが、病院担当者が取材対応に出てくることはありませんでした。暖冬とはいえ、真冬の深夜。日付が変わるころまで記者が張り付きましたが、何も動きはなく、いったん現場から引き上げました。

翌朝、夕利用の取材のため早朝から記者2人が再び病院に向かい、大阪本社からはカメラマンもかけつけました。上空では報道のヘリコプターが旋回し、ものものしい雰囲気になっていました。

病院はこの日から外来診療を停止。正面玄関も閉じられました。病院の窓越しに、院内を慌ただしく移動する医師や職員、患者に不安を与えないよう丁寧に説明する看護師らの姿がかいま見えました。高齢の入院患者がいる家族は「病院内で感染していないか心配。早く検査をして

確認してほしい」と不安そうでした。

さらにこの日朝、「同病院の70代の男性患者が感染し重症」との発表。医師ら数人にも肺炎症状があるといい、院内感染の恐れが早くも現実となったのです。



和歌山での医師感染を報じる産経新聞
朝刊1面（令和2年2月14日付）

■「感染ルート」を求めて

2月13日以降、同病院では医師や患者、その家族らの感染が次々と判明。しかし、発端となった医師の感染経路は依然として分かりません。

取材を進めるなかで、済生会有田病院の近くにあるホテルが外国人向けであると聞きました。しかし、記者が現地に行ってみるとすでに営業を休止。ホテル前には「去年、中華人民共和国湖北省武漢市で新型肺炎ウイルスが発生した時点で、宿泊受け入れ中止しております。今後の宿泊受け入れの予定もありません」と書かれていました。

コロナへのリスクを懸念して、事前に営業を休止していたのだろうか…。ホテルに人影もなく、関係者に取材することはできませんでした。地元の人によると、周辺の飲食店などには1月ごろまで、中国人とみられる観光客の団体

などがいましたが、その後はぱたりと見られなくなったといいます。

県は、感染ルートについてさまざまに調べたようですが、どうも、はっきりとは分かっていません。

その後、この病院関連では2週間にわたって新たな感染者が出ませんでした。そして3月3日、病院から支局に数枚のファクスが送られてきました。

「済生会有田病院 安全宣言」と大きな文字。添え書きには「病院内の2週間以上にわたる新型コロナウイルス完全陰性を認め、完全クリーン化が実現できましたので、3月4日より通常病院業務を再開します」と記載。病院関連の感染者数は、この時点で医師や患者ら計11人とどまっていた。文面から、病院のこれまでの苦悩と、ようやく再開にこぎつけたという安堵の気持ちが伝わってきました。

翌4日、正面入り口には「安全宣言」の看板が立てられ、業務は再開されました。とはいえ、この「安全宣言」という言葉に少しひっかりました。「目に見えないウイルスが相手。果たして『安全』『完全』とまで言い切っているのだろうか」と。

だからこそ新聞として、二度と感染が拡大しないよう、院内でどのような態勢をとったのか詳細に報じる必要があると考えました。ウイルス封じ込め対策だけでなく、病院では医師や看護師らが自らの感染の危険も感じながら懸命に診療に当たり、患者を安心させるために心のケアも行っていたでしょう。

これまで感染についての公式な発表は、常に県当局でした。「何とか病院の責任者や担当者」に直接聞けないだろうか」と取材を試みたのですが、結局かないませんでした。

4月に入ると、全国各地で院内感染が深刻化。東京や大阪などの医療機関では感染者が50人、100人、200人…と桁違いに増え、「医療崩壊」寸前の地域も出ました。こうした状況を考える

と、済生会有田病院の感染封じ込めは画期的ともいえます。それだけに、病院に直接取材できなかったことは今でも悔やまれます。

■人の動きが止まった

和歌山では、済生会有田病院以降は大規模な感染はありませんでしたが、3月以降、東京や大阪、京都などでは大規模なクラスター（感染者集団）が多数発生しました。折しもサクラの季節。この影響で、和歌山城公園の花見も当初は宴会を「自粛」としていたのを、看板を「禁止」の文字に大きく張り替え。土日の夜も花見客はまばらでした。



花見で「宴会禁止」と張り出された
和歌山城公園（4月撮影）



和歌山城公園では夜桜を楽しむ花見客も
まばらだった（4月撮影）

和歌山で自粛ムードが一気に高まったのは、4月8日だったと思います。前日の7日に政府が東京や大阪など7都府県に対して「緊急事態宣言」を出しました。和歌山はまだ対象外だったにもかかわらず、和歌山支局には8日朝から県内各地の施設や団体からイベント・講演会などの中止や臨時休業を知らせるファクスが次々と届きました。

「和歌祭」(5月17日)の神輿おろしの中止、太地町立くじらの博物館の臨時休館…。白浜町のアドベンチャーワールドも一足早く7日から休園しました。

弊紙の和歌山県版の紙面も、「中止」「休業」「自粛」の文字が並びました。「この和歌山で、人の動きも何もかも止まってしまう」と背筋が寒くなったのを覚えています。JR和歌山駅も閑散とし、構内のアナウンスだけがむなしく響いていました。



閑散とした JR 和歌山駅 (4月撮影)

■「発生報告」ににじむ家族の絆

和歌山県は感染者が出るたびに、仁坂吉伸知事が先頭に立って記者会見を開き、「発生報告」と書かれた報道資料を配布。2月13日の「第1報」以降、感染者の性別や年代、日ごとの症状などが記され、ホームページでも公開されています。

一連の「発生報告」のなかで、ある夫婦の記述がどうしても気になりました。4月初め、コ

ンビニエンスストアに勤務する60代の男性と50代の妻の感染が確認されました。男性は3月末に39度の発熱があり、約1週間にわたって高熱が続きました。コンビニにはその間、マスクを着用して3日間勤務。時間は午後9時から10時から午前7時だったといいます。高齢でありながら、深夜から早朝まで、高熱でも無理をして働いていたことが想像されます。

県の記者会見によると、この夫婦は3月下旬に娘の大学の卒業式のため東京を訪れ、和歌山県に戻ってから発熱したということです。上京したことが感染につながったのかもしれませんが、共働きの夫婦が娘の新たな門出を祝いたいという気持ちは、親として自然な心情だろうと思います。

また、20代の夫婦とゼロ歳の子供が感染した事例もありました。最初は夫、そして妻、約1週間後に子供の感染が判明。この子供は当初、両親が感染して入院している間は親せきのもとに預けられていたそうです。

「陽性」という2文字によって、親子が突然引き離されるつらさはいかばかりだったでしょう。今回のウイルスは、家族として最も大切であるはずの時間を奪ったことになります。

■感染者を追い詰めない

一連のコロナ関連の報道で、どうしても気がかりなことがあります。テレビの情報番組やニュースで、緊急事態宣言下に外出していた人へのインタビューです。

「今日はどちらへお出かけですか」「それって不要不急ではないんですか」。詰問調にマイクを向けるリポーターがしばしばみられました。

「仕事でやむを得ず」「病院に薬をもらいに行かないといけないので」など、多くの人が申し訳なさそうに答えていました。駅にいたある女性は「親が亡くなったので。みなさんに迷惑をかけないように気を付けて帰ります」と答えて

いましたが、聞いていてつらくなりました。

外出自粛を呼びかけるのはいいですが、マスコミがここまで一般の人を監視するように追い詰めていいものだろうか。権力への監視が報道の役割であるはずが、どうもはき違えているように感じました。

和歌山支局でも、緊急事態宣言発令などのタイミングで、街頭で取材することはありました。しかし「追い詰めるような質問の仕方はやめよう」と、デスクと申し合わせました。

新型コロナは、いつ、だれから感染するか分かりません。こうした不安が、感染した人への偏見や差別を生み出す土壌にもなっています。今回の「コロナ禍」は、患者自身にとってウイルスとの闘いだけでなく、世間の目を気にしなくてはならないところに、もう一つの恐ろしさがあります。

■「東京五輪」一色のはずが…

コロナ感染を機に、現場での取材方法も大幅に変わりました。感染防止のため、「人と対面しての取材はできるだけ控える。やむを得ない場合は、間隔を空けたうえで長時間の取材はしない」ことにしました。県内では数々のイベントが中止され、人にじっくり話を聞けない状況で、記事をどのように作ればいいのか。

テレビでは、番組の再放送が増えました。「新聞も、過去の記事を再掲載できればいいのに」とぼやいても、再掲載では「新聞」ならぬ「旧聞」になってしまいます。臨時休業、も許されず、格闘の日々が続いています。

本来ならこの夏は、日本中が東京五輪・パラリンピック一色だったはずですが、しかし、コロナで一気に吹き飛びました。

新聞づくりも同様です。「来年のことを言う」と鬼が笑う」とも言われそうですが、すでに悩ましいことがあります。来年の正月紙面です。今年の正月特集は、「紀の国から五輪へ」とい

うタイトルで連日、五輪での活躍が期待される選手を紹介したのですが、二番煎じ、は許されません。新しい視点での取材が必要ですが、そもそも来年に五輪が開催できるかどうか…。

コロナをめぐる感染者数の報道では、世界規模なら「〇百万人」、国内では「〇千人」「一日〇人」など数字に目が向きがちです。しかし、数字の向こうには一人ひとりの人生があります。感染防止のため取材方法は変わっても、人の心に寄り添う姿勢だけは崩してはならないと思っています。